

セッションNo.3の発表に対するコメント

一楽真

日本佛教学会第八十七回学術大会は「人間とは何か 人間定義の新次元へ——仏教から見る「人間」定義の新次元——」というテーマのもとに開催された。筆者はセッションNo.3のコメンテーターを担当した。その立場から第3セッションを振り返っておきたい。

一、高田文英氏の発表「仏教・真宗の生命観

——人権・平和論への一視座——」について

まず一人目の発表は龍谷大学の高田文英氏であった。「仏教・真宗の生命観——人権・平和論への一視座——」という題目で、仏教と真宗の生命観を検討し、仏教・真宗の立場から社会的な問題に向き合う基本的視座を確かめようとするものであった。その際に、一つ目に「仏教の基本的生命観」を尋ね、二つ目に「真宗の念仏者の生命観」を考察するという論の進め方をとっている。

「仏教の基本的生命観」においては、梯實圓氏の論考をもとに、「輪廻転生説にもとづく生命観」と「縁起の思想にもとづく生命観」の二つに整理している。その中で、「輪廻」の中の生存はすべて苦しみであり、激しい欲望のま

まに暴走している。すなわち、生命は根本的に大きな課題を抱えている」と述べている。つまり、生命自身が本質的に暴力性と罪業性を内包していることを仏教は教えていると言うのである。その上で、「自他の生命の困難な状況を見つめるゆえに、おのずから一切衆生との連帯感や、生命の痛みに共感する眼差しが説かれる」と述べている。すなわち、仏教の生命観には、人々の痛みに共感する感性が基本にあることを指摘している。

また、「縁起にもとづく生命観」では、「因と縁とは千差万別であり、一人ひとりがかけがえない存在である」と述べ、生命が代替不可能であることを押さえている。そして、「因と縁は無限の広がりを持ち、一つひとつの生命は宇宙的な無限の意味内容をもつ」と述べている。以上のことから、仏教の生命観は、生命の痛みに共感する慈悲の視点と、無数の関係性の中で動的に捉える智慧の視点からの生命観であると結論づけている。

次に、「真宗の念仏者の生命観」においては、真宗の信仰の核が「他力の信心」にあるという見定めのもと、生命観を他力の信心との関わりにおいて考察している。特に機法二種深信について、法の深信について「阿弥陀仏の智慧と慈悲の眼差しを通して、我々が本来持つべき生命観を教えられる」という「理想の方面」とし、機の深信については「阿弥陀仏のような生命観からは大きく外れている自身や社会のありさまを知る」という「現実の方面」と見ている。その上で、「理想と現実の間を右往左往しつつ少しでもよい方向を自分なりに模索するという生き方がはぐくまれていく」と述べている。それを「他者に対する寛容性」として、法然や親鸞の言葉にその具体性を尋ねることを、最後に「補論」として述べられた。

二、曾和義宏氏の発表「浄土教における仏と人間」について

二人目の発表は佛教大学の曾和義宏氏であった。「浄土教における仏と人間」という題目で、浄土教においては

人間が阿弥陀仏と対峙するかたちで語られてきたことに注意し、善導と法然の思想から「人間とは何か」について確かめようとする発表であった。内容としては、「阿弥陀仏との隔絶」「阿弥陀仏との関係性」「阿弥陀仏の視線」の三節からなっている。

はじめの「阿弥陀仏との隔絶」においては、救いを求める人間にとっては「いま」が重要であるのに対し、阿弥陀仏は「すでに」目的を達成した存在であり、時間的に追いつくことのできない隔絶が存在すると述べる。また、阿弥陀仏の入涅槃説については、諸仏の境界であって、三乗でも窺い知ることができず、まして凡夫に知ることとはできないことを挙げ、これも阿弥陀仏と人間の隔絶を示すものであると述べている。

続く「阿弥陀仏との関係性」においては、隔絶した阿弥陀仏と人間の間には、どのような関係が、どのようにして生じるのかを尋ねている。善導が『観経疏』において述べる「親縁、近縁、増上縁」の三縁に注目し、衆生からのはたらきかけに阿弥陀仏が応ずる関係性が成立することを確かめている。しかも、この関係は衆生の機根にかかわらず、称名念仏という行によって誰にでも平等に発動すると述べる。そして、これを受けたのが法然であり、念仏を往生の行として選択した阿弥陀仏の意を『選択集』で明らかにしていることを尋ねている。結論として、「平等」ということが阿弥陀仏の視点であると述べる。

これを承けて「阿弥陀仏の視線」においては、人間同士の関係性について論が進められる。その際に、善導の「慈心相向、仏眼相看」の語に着目している。それは、「仏のように慈悲をもって向かいあい、仏眼をもって互いに看することを述べている」ものだと言う。仏の視線にどのように映っているのかという観点に立って、自分自身に対しては罪悪生死の凡夫であると意識させ、他人を見る場合は平等の慈悲をもって見るように願っている、と述べている。

最後に「おわりに」として、これまで述べてきた善導の理解が現代において通用するのか、という問いを立てて、

凡夫という人間性を押さえることによって、現代における「人間定義の新次元」が見えてくると指摘して、発表は結ばれた。

三、コメントおよび会場からの質問

高田氏の発表については、一で述べられた「仏教の基本的生命観」と二における「真宗の念仏者の生命観」がどのようにつながっているかが分りにくいと感じた。一つは仏教の生命観と真宗の生命観は、一連のものとして見ることが大切であるのは勿論であるが、浄土教として、また真宗として立てられてきた必然性を考えるとき、そこにどのような展開があるのかが論じられていない故の分りにくさである。もう一つは、仏教の生命観に対して、「真宗の生命観」とはしなかった点にどのような意図があったのかが分りにくかった。実践真宗学という立場を意識して、具体的な念仏者の生き方を尋ねたいということであれば、ブッダとその弟子達の生き方から生命観を考えることも可能であったのではなからうか。

高田氏へのもう一つの問いは、二において述べられた「寛容性」が何によるのかということを明確に語る必要を感じた。発表では、二種深信の展開として寛容性が出てくるように述べられたが、その脈絡が聞き手には伝わりにくい。特に、二種深信は、善導自身が「一者」「二者」と次第をもつて機法の順で語っている。それを初めに法を挙げて、次に機という順序にして述べたことの意図も全く触れられなかった。二種深信から寛容性が出てくるとすれば、その理路が十分に示されなければならないであろう。

曾和氏の発表については、はじめに挙げられた阿弥陀仏と人間の隔絶ということが、浄土教において説かれる理

由が十分に述べられなかったように感じた。隔絶したものが、次にどう関係してくるのかという第二の課題に展開する際には、まず隔絶が示されることの意味を明らかにする必要があると思われる。これは、浄土教の人間観という基本的な課題に関わっているだけに重要である。これが一つ目の問いである。

二つ目として、称名念仏を掲げて衆生を平等に見る阿弥陀仏の視線という点はいく分かかったが、その仏の視線によって人間同士が向き合っていくことが何によって起るのか、この点を明確にする必要を感じた。「他人を見る場合は平等の慈悲をもって見るように求めている」と述べるが、凡夫に平等の慈悲がいかんして成り立つかは大きな問題である。はじめに挙げられた仏と人間の隔絶ということが、はやけてしまう可能性もはらんでいる。仏の視線による人間同士の関係ということが、具体的な課題であるだけに、さらなる考察が求められるところである。

お二人に関わることとしては、「浄土教の人間観」を考えていく際に、まず浄土が彼土として説かれることを問う必要があると指摘した。これは浄土教の必然性、あるいは浄土教が説かれなければならない意味とも関係する。浄土教は決して、この世を浄土にしようとする教えではない。だからと言って、単なる死後の世界として浄土を説くわけでもない。浄土とこの世がどのように関係しているのか、これを明確にしなければならない。筆者は親鸞の思想を研究する立場にあるが、特に浄土とこの世との関係に重点を置いたのが親鸞であると考えている。

これとも関連するが、浄土教が阿弥陀仏によって救われるということを語る根には、どのような人間観があるのかを問うことの重要性も指摘した。自覚自証の道として説かれてきた仏教の歴史からすれば、阿弥陀仏の救いは他者の介在を思わせる。実際、阿弥陀仏を自らの修行成仏にとって補助的に捉える考え方は現在でもある。その意味でも、浄土に往生することによって成仏という課題も満足することを説く浄土教のもつ意義を押さえておく必要がある。

もう一点、釈尊の入滅をどう考えるかということを描いた。仏滅をくぐって、「無仏」「末代」ということが、浄土教興起を見ていく際には外せないと思われる。ただ、仏滅後の時代であるから浄土教だと語るだけならば、浄土教は特定の時代のみに有効ということになってしまふ。時は末法、機は凡夫ということも、特別な時代の機根の劣ったものに限定して捉えられてしまふ。浄土教の必然性を考える上で、時代観と人間観を明確にしていくことが求められる。

最後に、会場から提起された質問について記しておく。

高田氏の発表に対し、お二人から質問があった。一つは「他者に対する寛容性」という意見に対し、寛容性は大切ではあるが、厳しさを失って単なる現状容認になる危険性があるのではないか、という問いであった。現実社会のさまざまな問題とどう向き合うかという点が大事ではないかという指摘であった。もう一つは、「少しでもよい方向」というのは、世俗的なことにとどまるのではないかという質問であった。仏教の視点をどこで確保できるのかという指摘として受けとめた。

以上、簡単ではあるが、セッションNo.3のコメントとしたい。